

勤儉貯蓄死語となる

明治以降日本は「富国強兵（殖産興国）」の旗を掲げてきた。旗の裏には墨痕鮮やかに「勤儉貯蓄」の字があった。この裏側の字が今急速にぼやけ消えつつある。そこに「浪費とゼイタクで消費を活性化」フレスミアム金曜日、三時から酒を飲もう」といった革命的な字が浮かんできている。

今日できることを明日やるな

私の知人に荒田新という少し変わった男がいる。

「予定、嫌いだ。何日何時何何という予定がある」と不機嫌になる。手帖にびっしり予定が記されているとふくれっ面である。具合でも悪いのかと聞いたら「実はこんな予定が」と手帖を見せて、それで憂うつなのだと言う。

中堅企業の部長職だが、これよく部長が務まるものである。務まるどころではない。会社では社長が最も信頼する人材で、ナンバーワンとして遇されている。

荒田は労を惜しまず働く。若い頃から仲間が尻込みする仕事を「私がします」と買って出て、どんなに遅くともその日のうちに仕上げしてしまう。社長が「明日すればいい」と言う。「いえ、やりますよ」と言い、社長、どうぞお帰ってください」と言う。

荒田が予定嫌いとはどういうことか。予定がびっしり詰まっている手帖を見せる人がいる。これを自分が重要人物である証明にしている。面会を頼むと手帖を開いて「すみません、その日は〇〇が入っています、翌日の午前中なら空いています」と多忙な身をひけらかす。

荒田はこういう相手が苦手である

「予定がびっしり」を自慢する心理が解らない。自分なら、予め未来の時間が拘束されている予定表を見て暗澹たる気持ちになる。

普通の人は将来の見通しが立たず希望が持てない状況に暗澹となる。これから一ヶ月間何の予定もないなら寂しい。一年間何も決まらぬ事がなければ張り合いがない。

荒田は普通ではない。手帖はまっ白。予定表は空白が理想である。雲が重く立ち込めた曇天がきらいで、突き抜ける青天が好きなのだ。

明日でもいい仕事を今日中に片付けるのも明日何もいままっ白な状態にしたいための「努力」なのだろう。

中央アジアの遊牧民族の間には、「明日すればいいことを今日するな」という格言があるそうである。

一日何もすることがないのは虚しい。明日することがあればそれはイキガイになる。だから今日時間があっても手をつけないでおくこと。朝になってお日様が昇ったから「さあ、やるぞ」と張り切って仕事に取り組みることができる。時間は流れていく。何もあわてることはない。

では明日することを今日のうちにすませてしまえばいいではないかという荒田流はやはりよくないのか。

かつて「明日できることを今日やるな」という題の本がベストセラーになったことがある。

「明日からやろう」と、先送りするのは怠け者でよくない。明日すればいいことを今日する。前倒しでも、今日という日がスカスカだからで、いずれも「今日からの逃亡」であると教えている。

昨日と明日よりも今日が最も大事という価値観に基く考えである。荒田は明日でもいい仕事を今日

している。前倒しであるが「今日からの逃亡」などと仰々しく言うほどのことではない。一日分の仕事を十分して終業後に残った仕事をしているのである。ともかく明日以降に「しなければならぬ」ことがいろいろおぼろざらにのうつつとおしい。だからできることとは今日中にしてしまおうというのである。

お客様との商談や会議、研修や子供の行事などの予定は今日片付けられない。こうした予定が増えたと不愉快になる。もし荒田が変だとするならばどうしてこんな変な人ができたのだろうか。

空包装、冷凍食品など効果的な保存方法がいろいろあるが、こうしたものがなかった時は芋類は穴を掘って暗い所に置いて長持ちさせるなど知恵を絞った。自給自足しなければ生き続けることができないからである。

これに比べて大陸の遊牧民族、狩猟民族は大地を移動することによって食物を得る。羊の牧草を求めて移動し、他の地域の富を略奪して生きる。チンギス・カンのモンゴル帝国は遠くヨーロッパまで遠征して略奪を恣にした。こうしなければ種族の幸福な生活を維持できないのだから非難はできないが、閉鎖社会の日本民族は食べ物の貯蓄によって明日に備え、平

常な生活を維持することができた。こうした食べ物の貯蓄は、島国の農業漁業中心の民族の知恵である。現在はビン詰め、缶詰め、真

経営管理講座 339 染谷和巳

世界でも恵まれた民族といえる。貯蓄は明日のためにする。今日勤勉に働き節約することによって明日の糧を確保する。

「食べる」は働くためのエネルギーを体に入れること。食べ物（お金）を蓄えるのは明日の活力、将来の幸福な生活、働けなくなつた老後の健康維持のためである。エネルギーを出す。明日何もいなくてもいい状態にしておけばエネルギーを出さなくて済む。

明日を空白にしておくことはエネルギーの貯蓄である。もちろん今朝がくれば昨日と同じように働いてエネルギーを消費する。しかし特別な予定には特別なエネルギーを使う。予定がなければエネルギー

迎合型時間短縮はやめなさい

ある社長が「社員の幸福」の条件のひとつに「労働時間が短いこと」を挙げている。長時間労働の是正は働き方改革の柱であり、実際に休みが少なく疲労が蓄積している人々にとっては、涙が出るほどありがたい幸福の条件であろう。これを、時間も仕事量もそれほど過酷とはいえない状態にある人が「そうだ、もっと時間を減らせ！」と呼応するネタにするのは間違いない。ここに問題がある。「プレミアム金曜日」は毎月最終金曜日を十五時終業にするという制度である。二月から始まり実施企業は二・五％。ある大企業は社員全員に遊ぶためのお小遣いを一人一万円支給したそうである。十五時終業などできないし考えられない会社にとっては、羨ましいを通り越してばかばかしい話である。ばかばかしいで済めばいいが、この狂気が社会の本流になりかねないから本当は恐い話である。

休みが少ないうえに毎月百数十時間の残業を二年も三年も続けている人に対しては、待遇の改善が早急になされなければならない。

現在、会社がこうした過重労働を強いっているなら、売上げが落ちて利益が出なくなっても大改革を断行しなければならぬ。もしそれほど社員を酷使しているのであれば、今以上の時間の短縮は必要ない。

特に二十代三十代の若い人を遊ばせてはならない。学ぶ時、鍛えられる時、この時は能力を伸ばして人間を作る時期である。この時期に棄てて逃げる人は四十代五十代に大成することはない。いずれ会社社の「武心塾」だより43号」にこうある。「旭ファイバーグラスの友澤社長が名僧に言われた。「まるで戦争にでも行くように悲憤感を漂わせているが、そんなに肩肘をはらさずに、困難とたわむれ遊ぶ気持で仕事をすればいいのではないか」。以後友澤社長はつねにゆつたりとした気持ちで仕事に取り組んだ。多忙を楽しむゆとりだ。荒田のような予定嫌いは極端だが、働き方改革も極端。勤儉貯蓄という美風を捨てて遊び人を礼讃する社会にしてどうするのだ。